



## ✿ キトラ古墳壁画保存管理施設の公開にむけて

9月24日(土)に国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区が開園します。公園内にはいろいろな施設がありますが、中でも注目されるのはキトラ古墳壁画体験館「四神の館」(以下、四神の館)と、特別史跡キトラ古墳です。

キトラ古墳は飛鳥時代の終わりころ、7世紀末から8世紀初めに造られた古墳です。石室内に四神・十二支・日月像・天文図の壁画が鮮やかに描かれていました。キトラ古墳そのものは特別史跡に指定されており、公園化にあわせて古墳周辺も整備されました。墳丘は失われた部分に盛土をほどこし、古代の大きさに戻りました。古墳の前に続く園路には、壁画の金属プレート(四神等の図像を凸線で表しており、紙と鉛筆等で図像の乾拓を採ることができます)や、墳丘周辺の地形模型があります。これらは触れて体感もできる展示となっています。

いっぽう、四神の館は、地下階がキトラ古墳を中心とした展示施設、地上1階が壁画を保存し、公開する施設になっています。

キトラ古墳の壁画は保存のために1,143点に分割して石室から取り出され、ながらく修理作業がおこなわれていました。これまで、作業の進捗にあわせて四神や十二支の図像部分だけの特別公開を飛鳥

資料館、東京国立博物館において文化庁・奈良文化財研究所等が開催してきました。このたび、接合が終わったキトラ古墳壁画を保存・公開していくために、四神の館の一階部分に文化庁のキトラ古墳壁画保存管理施設(以下、保存管理施設)が設置されました。奈文研はこの保存管理施設の運営と公開等の事業に協力することとなりました。9月24日(土)のオープンとともに、キトラ古墳壁画の実物を期間限定で公開する予定です(公開方法等は検討中)。

保存管理施設の中心部は厚い二重壁で囲われているので、温度・湿度を保ちやすく、万一の空調停止の際も急激な環境変化がおこりにくい構造となっています。見学者は、壁画を通路からガラス越しに見ることができます。通路の端には出土品の展示ケースもあります。

キトラ古墳壁画は薄い漆喰の上に顔料で描かれた脆弱なもので、伝統的な書画等と同じように、環境変化やムシ・カビ等によるダメージを比較的受けやすい文化財です。後世に少しでも良い状態で伝えていくためには、適切な温湿度を保つことや、強い光を避ける等の配慮が求められます。そのため、キトラ古墳壁画も公開する壁画の数と期間とを限定せざるをえません。壁画を守ることを最優先として、バランスをとりながら、保存と公開活用、そして調査研究をおこなっていくこととなります。

(飛鳥資料館 石橋 茂登)



特別史跡キトラ古墳の様子



四神の館での壁画公開(イメージ)